

授 業 レ ポ ー ト

看護福祉学部 看護学科 [4年制]

老年看護学実習
3・4年次 必修

今回のレポーターは

札幌西円山病院第10病棟で老年看護学実習中の4年生。左から植村駿さん(秋田工業高校出身)、梅田彩花さん(小樽潮陵高校出身)、松原美香子さん(北海高校出身)、佐用みどりさん(石狩南高校出身)。最終週に入った実習現場からのレポートです。



伝わらないもどかしさと、伝わる喜び、人生の大先輩からいただくものは全てが大きい。

疾患より人間にフォーカス。

「老年看護学実習」は全4週間、介護老人保健施設やグループホームなどの施設で1週間の実習後、長期療養型の病棟で3週間、マンツーマンで患者さんを担当します。

老年看護学の特徴は、日常生活の質の維持・向上の視点を大切にすることです。めざすのは、病院という環境下で可能な限りその人らしい生活ができる環境をととのえること。そのために患者さんのこれまでの暮らし、好みを知り、尊重することが基本です。患者さんの戦時中の話など私たちはイメージが難しいこともあります。じっくり向き合うと“人生の大先輩”として敬う気持ちりが自然にわいてきます。

たとえ毎日「はじめまして」でも。

私たちはそれぞれ担当患者さんの状態に合わせて、より快適に過ごしていただけるよう工夫をします。松原さんは車イスを使う患者さんと一緒に広い院内を散策しました。18病棟からなる広い札幌西円山病院ですが、患者さんは意外に院内を知りません。随所に飾られている絵画、季節の花々を眺められる絶景スポット、くまなく巡ると予想以上に見応えがあります。患者さんは「病院探検」と呼んで、喜んでくださいました。



ミニコンサート開催に向けて、「毎週金曜日の帰校日のほか、それぞれ自宅で、休日はカラオケボックスに集まって準備、練習しました。どうなるか不安でしたが、患者さんと協力して楽しいひとときが作れました♪」



松原さんの担当患者さんは「来週から編み物を始めるのよ」とうれしそう。「編み物がしたい」という希望に、作業療法士と連携して応え、病院探検の次の楽しみをつくりました。

一方、認知症が進み、コミュニケーションが難しいケースもあります。毎日、患者さんに何度も自己紹介している実習生もいます。最初は困惑しますが、「気持ちは通じる」と気づかせてくれるのも患者さんなのです。たとえ1時間後には忘れられても、私たちが関わることで患者さんが心から笑う、喜ぶ場面が必ずあります。お世辞も作れないピュアな表現だけに、実習生には何よりのご褒美、励みです。そんな1コマ1コマを積み重ねて患者さんの生活全体の向上に力になりたい、誰もがそう思っています。

ミニコンサート開催。

実習中は班単位で様々な取り組みをします。私たちは音楽レクリエーションを2回企画しました。1回目は歌、2回目は楽器を加えました。デイルームを飾り付け、患者さんに鳴子やタンバリン、手作りマラカスを配り、「花」「おぼろ月夜」「海」を一緒に演奏しました。楽し



病棟の看護師長や先輩ナース、本学教員とのカンファレンス。1日を振り返り、疑問や不安はできるだけその日のうちに解消します。

そうに口ずさむ患者さんはもちろん、リズムに合わせて見逃しそうなるほど小さな動きで鳴子を振る患者さんもありました。終了後、一人ひとりに声をかけると、表情が乏しくても大きなリアクションがなくても、近くで過ごしたから気づくことのできるうれしい反応がたくさんありました。老年看護学実習は誰かに何かが伝わる幸せが、深く心に染みる実習です。エールを胸に、この環境に恥じない看護学生になれるよう精進します!



「私たちの何倍もの経験を積んできた患者さんの価値観を理解するのは難しいのですが、向き合い、寄り添う看護の原点に触れる実感があります」(植村さん)。

担当教員より

老年看護学実習の醍醐味 —「もてる力」への着眼と高齢者の喜び

● 山田 律子 教授

老年看護学実習では、高齢者の「もてる力」に着眼した看護展開を大切にしています。例えば、ある学生は、食事介助を受けていた高齢者が手で口元を拭いていたことを見逃さず、自らの手で食べる楽しみを取り戻す環境を整え、さらにお洒落な人だったことを知り、化粧へと発展、その方の行動も拡大していきました。実習終了時、その方は「ありがとう」を連呼し、学生の手を強く握り締めて離れませんでした。

学生によるレクリエーションの企画も好評です。日常とは異なるイベントが、高齢者の新たな「もてる力」を引き出し、参加者同士の交流を深め、時には感動の涙もこぼれます。実習で逞しく成長した学生たちの姿を見ることは、教員たちの醍醐味でもあるのです。